

## 介護等体験実習の報告

### 教職を目指す上での介護等体験実習

江 藤 千 恵 (国際言語・文化学科3年)

小学校または中学校の教諭の普通免許状の授与を受けようとする学生には、社会福祉施設へ5日間、特別支援学校へ2日間の介護等体験実習が課せられています。本学では、実習へ向けての準備として実習の事前指導の時間が設けられていて、様々な方の話を聞いて実習への心構えができました。私は、その事前指導を受けて、「介護」や「特別支援」という言葉と向き合うことが自分にとって難しいことであるように感じていました。そして、実際に実習を行うまで自分が目指す教職にそれらが関係あるのかどうか分かりませんでした。

社会福祉施設では、デイサービスを担当したということもあり、比較的自立した利用者の方と関わりを持ちました。初めて入浴介助とその前後のお手伝いをした時は、利用者の方が嫌な気持ちになったりしないか気を使ってばかりで消極的になっていました。しかし、よく集中して見ていると、利用者の方にはそれぞれできる事とできない事があることに気づきました。手を貸すべき時を見極める事が最初は難しく感じられましたが、だんだんと分かるようになっていました。また、共に利用者の方も「あれをして、これをして」と自ら言うてくださるようになり、様々な場面で信頼関係が築かれていくのを身をもって感じる事ができました。それは実習を行うまでには考えてもいなかった、人とのつながりを「介護」の場面で感じる事ができた瞬間でした。

特別支援学校の実習に行く前は、社会福祉施設に行く時の何倍も緊張していました。2日間だけ

とはいえ、「先生」として学校に行き「特別支援」の現場に入るということをプレッシャーに感じていたためです。私が担当したクラスは小学2年生の男の子が1人で授業を受けていました。彼は視力の面で特別な支援を必要としていました。私が緊張して教室の扉を開けると、走り寄って来て、元気に挨拶をしてくれました。満面の笑みで瞳を輝かせていたのが印象的でした。それからの2日間は本当にあっという間でした。担任の先生は彼を手伝う事をほとんどしませんでした。私は最初、恥ずかしい事に自分の勝手なイメージだけで彼のハンディキャップを「かわいそうだ」とさえ思っていました。彼と一緒に授業を受けて、遊んで、笑って、文化祭の準備などにおける成長をみると、ハンディキャップとは、他人よりも強い個性なのだということに気付かされました。彼は社会に出てしっかりと自立していけるように、教材や校舎、勉強するための器具などに工夫がこらされた特別支援学校で練習をしているのだから、かわいそうでもないし、健常者と障がい者、と比べる事自体が間違いだと感じました。後日、特別支援学校で担当した生徒から手紙が届いた時に、彼の笑顔が思い出され、彼の人生に2日間だけでも関わった事を嬉しく思いました。

合わせて7日間の体験実習で私は、教師とはどうあるべきか、自分の理想の教師像を考える事ができました。人と人との密接な関わりを大切に、その人との関わりの中で人生を豊かにするための手伝いができるという面で介護と教育のつながりが見えました。1人1人の個性を尊重して伸ばしてあげる事ができ、自分自身を大切にする心、命を大切にする心を育むことを目指す理想の教師像を、特別支援学校での経験で見つける事ができました。実習に向かう前は自分にやり切れるか不安でしたが、終わってみると実習で出会った全ての方から得たものが多く本当に充実した7日間にする事ができたと感じました。それと同時に、

教職への道を進む上で、この介護等体験実習が大切なものであると強く感じました。

---

## 介護等体験実習を通して学んだこと

江口 祐樹（史学・文化財学科3年）

---

私は、中学校の社会科と高校の地歴科・公民科の教員免許の取得を目指し教職課程を履修しています。中学校教員の免許状取得のためには、社会福祉施設での5日間と特別支援学校での2日間の実習を行う必要があります。実習前は、教師になるために何かひとつでも学ぶことができれば良いと考えていました。そのような予想に反して、実習では大変多くのことを学ぶことができました。

7月6日と7日の特別支援学校の実習では、クラスの生徒8名に対して、担当教員が2人ついて、生徒の学習を支援する体制が整っていることに驚きました。いわゆる「教科書を教える」といった授業よりも遥かに大切な教育の原点（教科書で教える）を学ぶことができた実習期間でした。生活に必要な技能などを教える授業で、生徒ひとりひとりの立場を理解し、生徒にとって必要な支援をきめ細かに行う教師の姿を見て、生徒が学校を卒業した後に必要となる生きる力をつけさせることが教育の根本であることを学びました。また、現場の教師の熱い情熱が生徒の心を動かしている姿を目の当たりにして、教師はやりがいのある職業だと改めて思いました。同時に、私自身が教えることになる日本史について、日本史を学ぶことが社会に出た後にどのような意味を持つのか、日本史などの教科を通して本当に学ばせ身につけさせねばならない力は何か、などさまざまな疑問について考える機会になりました。

9月3日から7日の社会福祉施設の実習では、「人との接し方」を学ぶことができました。実習

初日は、利用者さんとどのように接したら良いかわからず戸惑いを感じました。しかし、トレーニングの補助や食事の準備などに取り組んでいく中で、相手のことを知るためには、まず、自分のことを知り、それを言葉として伝えることの重要性や、コミュニケーションの第一歩は挨拶であることを学びました。挨拶を通して、挨拶する方もされる方も気持ち良くなり、そこから会話がスタートします。挨拶は、日ごろから行っていることですが、改めて重要なことだと思いました。

実習を通して、教師にとってばかりでなく、日ごろの生活で大切なことを学ぶことができました。実習を通して関わった方々への感謝の気持ちを忘れずに、教職の道を進んでいきたいと思えます。

